

平成
24年度

すこやか長寿祭ふれあい交流会

第13回熟年メッセージ静岡大会

記録集・メッセージ集



平成25年1月19日(土)グランシップ中ホール・大地

すこやか長寿祭ふれあい交流会実行委員会



公益財団法人 しずおか健康長寿財団

目次

I	大会概要	1
II	オープニングセレモニー	2
III	ステージアトラクション	3
IV	ロビー・エントランスアトラクション	6
V	第13回熟年メッセージ大会応募状況	9
VI	第13回熟年メッセージ大会表彰式、作品発表	10
VII	第13回熟年メッセージ優秀作品	12
VIII	実行委員名簿	30



I 大会概要

1 名称

すこやか長寿祭ふれあい交流会

2 目的

熟年世代が今まで培ってきた知識や豊富な経験などを次世代に伝え、伝承・活用していくための手段としての熟年メッセージや幅広い世代の参加による文化活動の発表の機会を設けることで、急速に進展する高齢社会において、世代間の交流促進し、多世代間の生活観・価値観の違いを理解し合うことにより、誰もが生きがいを持ち続けて、健康で安心して暮らせる長寿社会の構築を目指す。

3 主催等

(1) 主催

すこやか長寿祭ふれあい交流会実行委員会
公益財団法人しずおか健康長寿財団

(2) 後援

静岡県、財団法人静岡県文化財団、財団法人静岡県老人クラブ連合会、NHK 静岡放送局、静岡新聞社・静岡放送、中日新聞東海本社、静岡朝日テレビ、テレビ静岡、静岡第一テレビ

(3) 協賛

羽立工業、静岡県老人保養所「寿荘」、静岡県牛乳普及協会、静岡県牛乳協会、静岡銀行、スルガ銀行、花王カスタマーマーケティング、明治、静岡ガス、天神屋、竹酔、静岡県エルピーガス協会、シダックス、大塚製薬

4 開催概要

(1) 日 時 平成 25 年 1 月 19 日 (土) 11 時 30 分～ 16 時 00 分

(2) 会 場 グランシップ中ホール・大地

(3) 観覧者 868 人

5 内容

(1) 音楽活動・生きがい活動を通しての多世代間の交流促進・絆づくり

- ・ わらしな太鼓 「倭鼓舞琉 (わこまる)」
- ・ 梨花幼稚園マーチングバンド&リカマーチングアカデミー
- ・ 夜桜乱舞の踊り 静岡まつり技の会
- ・ リフォームファッションショー 県老人クラブ連合会審査会優秀作品
- ・ シニアコーラス 四季を歌う会

(2) 熟年メッセージ大会

表彰式及び優秀作品の発表 (3 作品)、講評

(3) ロビー・エントランスアトラクション

- ・ しずおか健康創造 21 ポスター標語川柳コンクール優秀作品展示
- ・ ねんりんピック宮城・仙台 2012 美術展受賞作品展示
- ・ 第 15 回すこやか長寿祭美術展県知事賞受賞作品展示
- ・ 自立体力全国検定 羽立工業株式会社
- ・ ニューススポーツコーナー (スカットボール・ディスコン)
- ・ 似顔絵コーナー 「似顔絵・ウフフ」

II オープニングセレモニー

小学生を中心に構成されたわらしな太鼓「倭鼓舞琉」の太鼓演奏が元気に演奏された後、大会会長の佐古伊康しすおか健康長寿財団理事長の開会の言葉が満場の来場者に披露されました。さあ、地域・世代を越えた生きがいづくり、絆づくりのはじまりです。



佐古伊康
大会会長



大会実行委員の皆さん



静岡県健康福祉部の来賓の皆さん

わらしな太鼓 「倭鼓舞琉」(わこまる)

藁科公民館の太鼓教室の受講生を元に結成された和太鼓演奏サークルの皆さん。

元気な掛け声とともに演奏してくれたのは、「集い」、「みのり太鼓」、「山のお囃子」です。全員の笑顔から元気をいただきました。



静岡市の服織小学校、南藁科小学校、大川小学校、安倍口小学校、
竜南小学校の18名の生徒さんと父兄・講師の皆さん



Ⅲ

ステージアトラクション

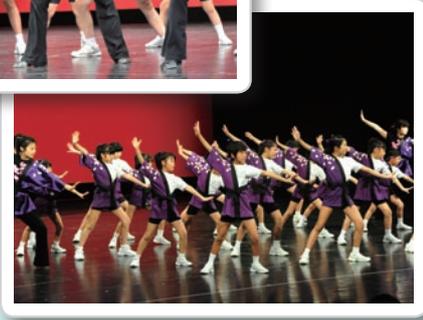
梨花幼稚園マーチングバンド & Rika マーチングアカデミー

リカマーチングアカデミーによる演奏に続いて梨花幼稚園（静岡市下川原）の年長さん 99 人による楽しい音楽とダイナミックなマーチングが披露されました。演奏曲は、「GIVE ME FIVE」、
「生きてる生きてく」（アカデミー）、「I was born to love you」、「君の瞳に恋してる」、「We are the world」、「Sugar baby love」（マーチングバンド）です。



静岡まつり技の会

「静岡まつり」メイン行事の「夜桜乱舞」のPR 隊として活躍しているデモンストレータと竹千代キッズの皆さん（35 名）に踊りで盛り上げていただきました。曲名は、「さくら '96」、「SAKURA Doo-Wap」、「竹千代殿どん」です。



リフォームファッションショー

高齢者のおしゃれ心を深めると共に、「使い捨て時代の物の大切さ」について世代を超えて考える機会として行われた「高齢者いきいき創造広場リフォームファッションショー」が平成24年12月に行われ、その中の優秀作品を製作者本人がモデルとなり披露していただきました。

シニアクラブ静岡（静岡県老人クラブ連合会）
審査会優秀作品から

カジュアル部門(9点)



川口きよ江さん (三島市)
無地の着物と絞りの柄の組み合わせですが、模様づくりは全体のバランスを考えて型紙を作り、何度も製図を書きました。心を込めた作品です。



鈴木アイ子さん (三島市)
チュニック丈のリバーシブルコートと父の着物一式を使い、変形ベストと変形パンツロンをつくりました。両親の思い出が詰まったものが出来ました。



村松敦子さん (静岡市)
大島紬の着物からコートとブラウスを製作。男物の着物の端切れを襟と袖、身頃の脇に入れ、ボタンも工夫しました。スッキリとお洒落に出来ました。



野末量子さん (湖西市)
親達の思い出の着物と羽織でリフォーム。作務衣、ちゃんちゃんこ、帽子など製作。羽織の裏地には粋な鷹の絵が描かれており、マフラーにしました。



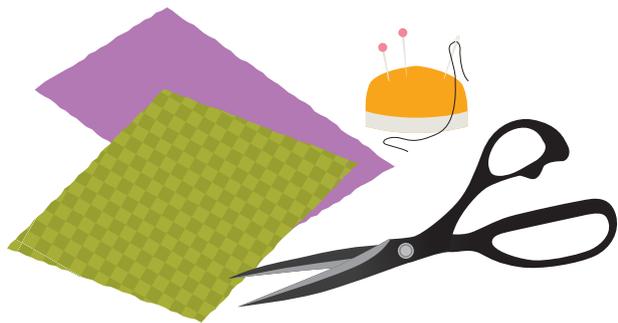
久保田里子さん (清水町)
女物の作務衣は、絹の長着から製作。軽くて着易いです。男物の作務衣は、ウールの女物単衣着物でリフォーム。マフラーはボカシ染めで工夫しました。

足立澄江さん (三島市)
長い間単筒に眠っていた親の形見の大島の着物をリフォーム。ロングスカートとベストには沢山のパッチの布を使用しましたが、出来上がって嬉しいです。



斎藤千鶴子さん (掛川市)
父の思い出の大島の着物と羽織、女物の大島紬を利用してスーツやバックを製作。思い出の着物が、洋服によみがえり着られることが大変嬉しいです。





吉岡澄江さん (掛川市)

ウールの縞の着物からポンチョ風の上着を製作。縞の色を合わせるのに苦労しました。春と秋はブラウスを下に着たり、冬はセーターを着ると季節によって変化を楽しめます。



鈴木和子さん (静岡市)

姉からもらったロウケツ染めの着物からコート、ベスト、ホシエット、シヨールなどを製作。花の会のボランティアにお出掛けする時に着ようと浮き浮きです。

フォーマル部門(4点)

大胡田壽子さん (御殿場市)

嫁入りの時の大切な留袖と不用のロングスカートとの併用で二部式のスーツにリフォーム。上着を着てシックにコーディネートしたり、脱いでブラウスとロングスカートとでコーラスや発表会に参加でき、浮き浮きです。



福田ヨシノさん (御殿場市)

嫁入り支度の品でドレス、バック、ベストを製作。ベストの裏地は母の形見の羽織です。これを着ていると、母の温もりを感じる思い出がいっぱいで最高に幸せです。



武田信子さん (静岡市)

明治20年に祖母が嫁いできた時の着物が母から手元に。それをチャイナドレスにリフォーム。定年退職後に始めたマジックのボランティアとして老人施設に慰問に回るときに着用しています。



森下せつさん (静岡市)

父が求めてくれた大切な留袖を孫の結婚式用のドレスとして急遽製作しました。柄の配置を上下に生かすために色々工夫しました。端切れ布でインナーも出来ました。



シニアコーラス 「四季を歌う会」

宮川洋一先生の指導を受けて静岡市清水区中心に活動している皆さん。年々参加者も増え、今年は140人を超える会員さんが参加してくださいました。会の基本精神は「歌う喜びをみんなで分かち合う」ということ。自分達で歌う喜びを表現しようというものです。日ごろの活動の発表の場として、参加してくださいました。

曲目は「冬景色」、「春よ来い」、「森の水車」、「希望のささやき」、「明日という日」です。宮川先生からも素敵な歌声を披露していただきました。



IV ロビー・エントランスアトラクション

似顔絵コーナー 似顔絵・ウフフ

似顔絵描きに参加してくれたのは、藤枝市内を中心に似顔絵描きのボランティア活動をしている「似顔絵・ウフフ」の皆さん。人気が高く、多くの来場者が喜んでいました。



自立体力全国検定 羽立工業株式会社

知らない間に進んでいる「体力の衰え」を簡単なテストで客観的に測定し、生活アンケートとあわせて総合的に分析します。

姿勢変換能力の測定



4つの日常生活の動きを基本にチェック!

- ①歩く
- ②家事をする
- ③着替える、またぐ
- ④起きる、立つ

手作業能力の測定



歩行能力の測定



健康づくり、絆づくり、生きがいづくりにつながるような参加体験型のコーナーを設置して、来場者の皆様に楽しいひと時を過ごしていただきました。

ニュースポーツ スカットボール



ニュースポーツ ディスコン



ねんりんピック宮城・仙台2012美術展受賞作品

第15回すこやか長寿祭美術展 県知事賞受賞作品



部門	No	作品名	作者	ねんりんピック	すこやか長寿祭
日本画	①	陽だまりの中に	高橋哲彦	銅賞	
	②	ドライフラワー	水野あい子		静岡県県知事賞
洋画	③	月に光る	齋藤雅紀	宮城県知事賞	
	④	復興	河野修治		静岡県県知事賞
彫刻	⑤	夢の刻	上原 清	仙台市長賞	静岡県県知事賞
工芸	⑥	集乱蝶	江坂君代		静岡県県知事賞
書	⑦	凌駕	栗田芳安 (芳葉)	銅賞	静岡県県知事賞
写真	⑧	捕った一雨乞い祭りー	松浦眞一郎		静岡県県知事賞

第10回しずおか健康創造21

ポスター 標語 川柳コンクール優秀作品



V

第13回熟年メッセージ大会応募状況

(1) 応募対象者

県内在住者で、自身を熟年と思っている方

(2) 応募テーマ

特に定めなし。これまでの人生・これからの人生で社会に強く伝えたい内容であること。

(3) 応募状況

応募件数は、男性 50 件、女性 39 件、団体（連名）1 件の合計 90 件であり、年代別では男女とも 70 歳代が一番多かった。

また、地域別では東部 35 件、中部 35 件、西部 20 件であった。

応募者のうち、最高齢者は静岡市在住の 88 歳男性であった。

(4) 年代別・男女別応募状況

年代	男性	女性	連名	計
40	1 件			1 件
50	4 件	1 件		5 件
60	15 件	13 件		28 件
70	23 件	15 件		38 件
80	7 件	10 件		17 件
90				
連名			1 件	1 件
合計	50 件	39 件	1 件	90 件

(5) 地域別応募状況

地域	件数
東部	35 件
中部	35 件
西部	20 件
合計	90 件

(6) 審査状況

応募件数 90 件のうち 1 次審査（書類審査）を通過した 9 名に対して、すこやか長寿祭ふれあい交流会実行委員会委員（委員長：日詰一幸）により、11 月 30 日に本審査オーディション審査を実施し、順位を決定。

思い・伝える・つながる
熟年メッセージ募集

人生いろいろ。まだまだこれから。
今こそ熟年の元気を発信！
「心に残る感動体験」「私の人生経験」「私のいきがい」
「これからの目標」「次世代に伝えたいこと」
「現代社会に闘っ！」など、テーマは自由です。
あなたの思いを、社会に発表してみませんか。

熟年メッセージの発表
心に残る感動体験

募集期間
平成24年6月1日(金)～
10月26日(金) ※日祝祭日除く

表彰・発表
平成25年1月19日(土)にグランシップで開催する
「すこやか長寿祭ふれあい交流会」において行います。

対象者
静岡県内に在住し、ご自分を熟年と思う方(具体的な年齢制限を定めてません)
グループ(2人～5人) ※日本語が出来る外国人の方も参加可能！(国籍は問いません)

テーマ
自由(特に定めません)
「次世代に伝えたいこと」や「これから挑戦したいこと」など、何でも結構です。

応募形式
【文章の場合】2,000文字以内 縦書きA4用紙400字詰め用紙 20×20を使用
【文章以外の場合】発表時間 10分以内 映像の場合はビデオテープ(又はDVD)、音声の場合はMD

お問合せ
すこやか長寿祭ふれあい交流会実行委員会事務局 TEL: 054-253-4221
FAX: 054-253-4222

VI

第13回熟年メッセージ大会表彰式

県内各地から応募のあった90点の中から、1次、2次の審査会を経て選ばれた優秀作品3点の表彰を行いました。

グランプリ

小澤正人さん（静岡市葵区）

「やらないで後悔はしたくない」

準グランプリ

山崎道生さん（藤枝市）

「終わりのない夏休み」

第3位

吉田 博さん（熱海市）

「『余生』を『世生』に」



左から小澤さん、山崎さん、吉田さん



グランプリ受賞者の小澤正人さん



準グランプリ受賞者の山崎道生さん



3位受賞者の吉田博さん



第13回熟年メッセージ優秀作品発表

表彰式に続いて、グランプリ受賞作品他2作品の優秀作品が本人により発表されました。その後、西谷祐一実行委員長から第13回熟年メッセージ応募作品全体の講評が行われました。いずれの作品も力作ぞろいで、胸を打つ感動的なものが多かったと述べられました。

準グランプリ受賞 山崎道生さん



身寄りのない高齢者、障害者への支援活動の立ち上げに成功した事例を通じ、新しい自分を見つけることが出来たこと、また、行動することの大切さを発表されました。
(詳細は14、15ページです)

グランプリ受賞 小澤正人さん



安定した生活を捨て、夢であった映画解説講師への道に入った経験から、夢に挑戦することの大切さと家族や友人の支え、励ましが後押ししたことを発表されました。
(詳細は12、13ページです)

3位受賞 吉田 博さん



東日本大震災へ寄せられた援助に対する謝意を伝えるため、台湾へ単身で回り住民交流した経験から、社会との関わりに挑戦する事の大切さを発表されました。
(詳細は16、17ページです)

実行委員長講評



駿州夢づくり交流会
西谷祐一さん

今回応募いただいた90点の作品の内容は、ご自身の大病から人の温かさに気づき感謝していること、家族の介護を通じて絆の大切さを学んだこと、地域の社会活動に参加して交流する友人が増えたこと、若い時から夢であった趣味の世界にチャレンジし生きがいとなったこと、健康維持のため毎日努力していることなどで、いずれも、多くの人達の応援と励ましを得て、互いに支え合い、寄り合うことの大切を訴える作品で心を打たれる内容でした。

発表された3つの優秀作品は、自ら実践をして体験した点や地域社会の中で周りと関係を保ちながら貢献されている点でも心に響く、感動的なもので、私も多くのことを学ばせていただきました。

お聴きいただいた皆様にも本当に勇気をいただき、感動的な作品であったと思います。

やりないで後悔はしたくない

静岡市葵区 小澤正人

第一歩のスタート

50代に入り、ずっと考えていたことがありました。それはこのままで自分の人生、良いのだろうか。やりたい事があるのに、それに挑戦しないで一生を終わって、それで本当に後悔しないのだろうか。

50代で安定した生活を捨て新しい事を始める事は無謀なんですよ。悶々とした毎日が続きました。勇気を与えてくれる本も数多く読みました。そして思いました。「やって駄目ならあきらめはつく。しかし何も挑戦しないで最期に後悔する人生はいやだー」。

そうは考えても、一家の大黒柱としては日々の生活の事も考えなければ無責任です。幸運にも子供たちも就職し、大きな心配事はなくなりました。

そして最も大事なことは、家族の賛成を得る事ができるかです。家族には何回も何回も「おとうさんはこんな事がしたいんだよ」と話しました。確かに大丈夫かなと最初は思ったことでしょう。大学卒業からずっとサラリーマンだったからです。今やらばいつ

てとを考えても不思議ではありません。しかし家族は力強く背中を押してくれました。「やりたい事があるんだから、絶対にやった方がいいよ。」家族はやはり最後の応援団です。そこから私の新しい第一歩はスタートしました。

解説を体験して

私は子供のころから、映画が大好きでした。両親の影響が大きかったです。映画は楽しく、人を幸福にしてくれます。好きでも興味でした。それがまさか今の仕事になるなんて想像すらしていませんでした。しかし人生どうなるかわかりません。ある公共機関から映画解説を依頼されました。それも全く知らない人達に對してです。以前から憧れはあったかもしれませんが、まさか本当にそんな話が来るとは。怖いもの知らずで快諾しました。心地よい緊張でした。そこでは9年間映画解説をしました。するとそこで話を聞いた人から「面白かった。うちの団体でも話してもらえませんか」という依頼が来るようになりました。

私の心に変化が出てきました。人前で映画の面白さを話す事が楽しくてワクワクする自分に気付きました。あれ、今の仕事とは違つぞ。組織はまず組織の理論が優先されます。仕方ありませんが、常に自分の個性を押し殺している事に強いストレスを感じていました。それがどうでしょう、前日からどうしたら参加者を喜ばせる事が出来るか、ワクワクする自分がいるのです。これが自分だと確信しました。皆さんに映画の楽しさを伝えよう。そして元気にしよう。そして自分もパワーをもらおう。

大きな決断

4年前に早期退職をしました。やはり大きな決断でした。気持ちも何回も揺らぎ、こんな年になって馬鹿だとも思い、家族にも申し訳ないとも思いました。これは偽らざる心境です。眠れない夜もありました。「定年までもう少しなのに」「無理するな。生活は大丈夫か。」「反対に」「お前は仲間の期待の星だ、頑張れ」「何でも協力するから」と嬉しい励ましもありました。きつと熟年世代の本音だと思います。誰もが定年近くなれば今までの人生を振り返り、そして先の永い人生を考えます。

私は現在映画解説講師として活動しています。スタートしたばかりですが、人々の喜ぶ顔が最高です。「楽しかったよ」「元氣が出ました、今度いつ来るの。」「中には泣きながら私の手を握って「今日あなたに会えて本当に幸せでした」と話してくれた時、自分の決断は間違っていないと強く感じました。

不安は沢山ありますが、喜びはその何倍もあります。まだまだ自分の力は小さいですが、多くの方々が元氣になるよう頑張ろうと思っています。

多くの本からも勇気をもらいました。その中で一番背中を押してもらった言葉を熟年メッセージとします。『自分の人生だろ!!』



終わりのない夏休み

藤枝市 山崎道生

リタイア生活は自分を生かすための絶好の機会です。それは「終わりのない夏休み」のようなもの十分時間を使えますし、腰を据えて取り組めば何か事を成すことも容易です。趣味や運動、地域活動やボランティア活動で自分を輝かせ、新しい自分を見つけることが出来るでしょう。

私は現在72歳、元高校教師です。定年後はテニスや登山を思う存分にと楽しみにしていましたが、いざ退職してみると、まだ若い。あまりに若すぎる、もっと何か有意義な仕事をしなければと思いつ立ち、何度も折衝して、2年間上海の大学で教壇に立つことになりました。

学生の向学心はとても旺盛でそれに応えようと休日も街歩きを控えて、指導の準備に集中しました。教科書を自ら編集し、中国人教師用の指導書までも作成しましたが、これは人生初の経験でした。学生や若手教師との交流が楽しくて、予定を2年超えて滞在しましたが、毎日が新鮮で充実していました。多分リタイア生活の中での仕事のため、心に余裕があったからでしょう。

帰国してからはテニス、登山、旅行、パソコンに明け暮れる日々でした。しかし、1年も経つとそれらは日常的になり過ぎてしまいました。市の国際友好協会のボランティア活動にも係わりましたが、燃焼したとまでは言えません。

転機となったのは民生委員となり、地域との係わりが深まってからです。地域も高齢化が加速し、高齢者世帯はもとより独居高齢者もかなりいて、巡回訪問の合間に病院へ送迎したり、福祉施設への入所申請に同行したり、障害者手帳の申請で市と折衝したりしてきました。しかし入院や施設入所時の身元保証まで背負い込むとなると個人としての限界を感じてしまいます。

そんな時名古屋のNPO法人「きずなの会」の活動を知りました。身寄りのない高齢者や障害者を会員として、24時間態勢で、身元保証や入院、手術の付き添い、葬儀、納骨まで家族に代わって行っているのです。

「よしこれだ、静岡にもこの活動が絶対必要だ」、思い立つと気になって仕方がありません。教育の世界しか知らない自分にやれる能力が有るのか分かりませんが、テニスや登山を止めれば暇と体力だけがあります。躊躇いもありましたが、頭の中で考えているだけでは先に進みません。無から有を生み出すことへの挑戦、私は思い切ってリタイア生活を変える覚悟をしました。

1年かけて関係先に粘り強く交渉し、壁に跳ね返されながらも一つずつ乗り越え。準備を進め、行政や地域の方の多くの協力を得て2009年1月に「きずなの会静岡事務所」を開設することが出来ました。

それから4年、早朝の緊急呼び出しで家に駆けつけ脳血栓で倒れた会員を救急車で入院させたこともあります。癌を患う高齢者を入院させ手術に立ち会ったり、生活保護を受けている会員の転居の身元保証や引越しの世話などしたりしました。既に7人の方がお亡くなりになりましたが全て喪主として、手厚くお送りしました。

葬儀や納骨にも心配が要らないことを知ってほっとする人達が多いです。いずれも子供や、兄弟などを頼れない、または頼りたくないと言つう人々です。NHKをはじめとして多くのマスコミが何度も特集番組で報道したこともより、活動は地域に浸透し、会員は既に想定もしなかった130〜140人を超える大きな組織となりました。

この4年間の充実感は格別でした。高齢の私が高齢者を支援する、そのことに全く違和感はありません。逆に面談などで人生の苦しさ、機微にも触れることができ、教えられることも多々ありました。未知の福祉の世界でしたが、日を重なるうちに、福祉施設情報、関係の法令、生活保護法や埋葬法の内容まで理解できるようになりました。

私のリタイア生活つまり「夏休み」は「無から有」を生み出しただけでなく、新しい自分を生み出した期間でもありました。

概して人はみな誰でも思い、考えることは良くします。その能力では人に大差がありません。行動するか否かで差が出るのです。その行動を生み出し持続するには体力が必要です。そしてその体力はどこから生まれるのでしょうか。

皆様もごらんになったでしょう。あの障害者のパラリンピック、水泳とか車椅子レースでも見られました。手が足にダメージがあっても体の根幹というべき**強靱な体幹**から信じられない体力が生み出されていました。

若いうちからダイエットで美を求めるのもいいでしょうが、それよりはトレーニングで体幹を鍛えて体力をつけておくことの方が大切だと思います。それは誰にもやがて来る夏休みの中で、自分の思いや考えを行動に移し、そして実現し、日々を充実して暮らすための大きな礎になると私は確信しています。

私の「夏休み」はまだまだ続きます。



高齢者
フォーラム主催



きずなの会静岡
メンバーズサロン



「余生」を「世生」に

熱海市 吉田 博

私は体験を交えて「余生」を社会と関わる「世生」にするお話をします。

3年前の秋、東京の友人ご夫妻から「故郷に越したので遊びに来ないか」と誘われました。出掛けて半年後に東日本大震災。私たちが逗留したのは岩手県の小さな漁師町、大槌町でした。それまで縁のない土地でしたが祭りに多くの老若男女と触れ合ったのでリアス式の風光明媚な町が津波で壊滅するTV映像は衝撃でした。

ひと月ほど経った頃でしょうか、案じていたご夫妻から電話。開口一番「すべて流されてしまったわ」。ご夫妻は辛うじて難を逃れ、仮設住宅に入居したものの宵宮に酒を酌み交わした甥ご夫婦は甥だけ助かり、新妻と母親は目前で津波の中へ消えていったので言葉を失いました。

「私たちに出来ることはないか」。震災直後からボランティアの活躍が報じられていましたが腰痛を患う身で被災地へ行っても足手纏いになるだけ。TVをただ見続け、深い無力感に悩まされていたので素直に尋ねました。

「熱海の温泉で話を聞いてほしい」。この予想外のひと言で悶々とした気持ちは消え、「人にはそれぞれの役割がある」と気付けられました。私たちはご夫妻の吐露する胸中に少しでも寄り添えるように傾聴し続けました。

ご夫妻は逆境にめげずに奮起してNPO法人を発足させました。町の復興にかけるその熱意にうたれ協力する一方、独自の活動として友人らに蔵書の提供を呼びかけ、被災地へ寄贈しています。私の趣味はウクレレですが「スーパークレレチーム」のメンバーと参加した「ヒルトン小田原リゾート」などの被災地支援ライブは多くの協賛を得ました。

活動で関心を抱いたのは海外からの援助の中で台湾の支援が突出している事実です。台湾の平均年収は約150万円。日本の3分の1程ですが義捐金は200億円を超えています。被災地にすぐ届けられ、ご夫妻からも「あの時は救われた」と聴かされましたが国は諸般の事情で公的に謝辞を述べていないと報道で知りました。多くの目はとかく被災地に向けられていました。震災から一年を迎える頃から支援の謝意を「草の根交流」で伝えられないかとの思いが日増しに強くなりました。

台湾をローカルバスと普通列車で一巡すればきつと多くの人に誠意が伝わるはず。少し不安もあり友人らに話すと「古稀を迎えるオジさんがひとりか・・・」。初訪問で、よつやるよ」。反応は概ね冷やかでしたが意を決して関係先に相談しました。

「それは喜ぶますよ」と横浜の中華街にある華僑總會からは早速、台湾の旗と謝辞の翻訳文が送られてきました。「感謝。日本大震災巨大支援。末永い親善を望む友好之旅」。この言葉と両国の

ワッペンを付けて昨年2月初めに20日間の旅へ。各地の反響は予想以上、日めくりでドラマが展開しエピソードは尽きません。

特に好意的なのは若者です。歩いていたり、車中では笑顔でVサインを示す、女学生グループは「一緒に写真を」と駆け寄ってくる。道に迷うと車に乗せてくれる。観光案内のスタッフは宿へ同行し値引き交渉を始める。武術太極拳の稽古に誘われ合気道を披露し武道談義に花が咲く。長距離バスの運転手は助手席に導き「バナナを食べる、煙草を吸うか」と気遣い、私を乗客に紹介すると一斉に拍手。仮眠すると「退屈なら運転するか」。流石にこれは断りましたが……。日本語教育を受けた年配者も「よく来てくれた。以前、台湾が被災した際は助けられた。苦しい時はお互い様」と瞳を潤ませ春節（旧正月）の宴席に誘ってくれる。1日ひと言ずつ覚えた単語と筆談、片言の英語を交え「オンセン、フジヤマがアナタを待っている」と熱海・静岡の観光パンフレットや絵はがきを渡しての交流は鈍った脳を刺激し、全身の細胞が日毎に蘇っていきました。

これら初めての体験で学んだのは「余生」を「世生」にするプロセスです。「新しいことを始めるのに歳は関係ない」（96歳のシスタージャンヌ・ボッセさん）との箴言は萎える心の糧になります。貝原益軒は「老後は一日を十日と考え、千金の値で過ぐせ」と諭しています。

言葉は言霊。自分を鼓舞するには「から」を「ても」に言い換えてみる。例えば「もつ歳だから」「身体が弱いから」を「歳はとつても」「身体が弱くても」と表現するだけで心は軽やかになります。長寿社会のいま60、70はハナ垂れ小僧とか。それならなお自身に

言い訳を作らず、少々やんちゃ気分になり、心に浮かんだ思いを大切にしてみる。現役を退いた第二の人生はこれまでのしがらみから解放される好機と捉え、柔軟な発想で社会との関わりに興味を持つてはいかがでしょうか。一歩踏み出す勇氣と好奇心でその思いに向かえばきっと「世生」にふさわしい新しい生きがいが見つかると思います。挑戦して体得する喜びはより心豊かに人生を過ごすスパイスにもなるはずです。成否の結果は二の次にして、今日からあなたもオンリーワンの「世生」を追求してみませんか。



熟年の挑戦と生きがい

静岡市清水区 大石瑤一

60歳から挑戦した中国語の習得と私流の日中友好交流活動を振り返り、今後の更なる取り組みを考えてみました。

私は60歳で定年退職すると決め、後半生をどのように生きるか考えるようになりました。しかし、そう簡単には今後の具体的な生き方が思い浮かんできませんでした。

ある時、約40年前の大学の親友から珍しく便りをもらいました。彼は長年の東京暮らしをやめて沖縄で生活することにしたという内容でした。彼は卒業後米国に留学し演劇を学ぶと張り切っていました。私は留学の話聞いて、実に羨ましく思い、何時か留学してみたいと強く憧れました。彼の便りを見て、あの時の思いが再び蘇り、「そつだ」退職後は留学しようと思き、眼前が急に明るくなりました。会社の旅行で香港、広州へ行きました。広州の市街を観光した第一印象は、中国は多様で面白そつだと思き、何時か自分の足で自由に旅行してみたいと夢を抱きました。留学と中国を自由に旅行する二つの思いを合わせて、中国に留学してまず中国語を習得しようと思き目標を立てました。

65歳で、勇躍上海の語学学校に入学しました。念願の留学が叶

い感無量です。学校の授業は全て中国語です。最初から教師、同窓生の話聞き取る事も、話す事も殆ど出来ません。同窓生は世界各国から来た20歳前後の若者で、吸収力も適応力もあり、将来中国語で仕事をしようというモチベーションが高く、習得速度が速いのです。こんな状況と自分の力を比べて、全く情けない気持ちになり、留学の喜びは一転憂鬱な気分になりました。しかし、彼らは若いし、生き方も違うから、私なりのマイペースで頑張ろうと思き気持ちを切り替えました。しだいに学校生活にも慣れ、誰とも簡単な会話ができるようになり、自信も付いてきました。一人で中国各地を旅行できるまでになりました。帰国後、今日に至るまでも中国語の学習を継続しています。

当初は、中国語を習得することが目標でしたが、しだいに何か物足りなさを感じ始めました。習得した中国語を活用して、ボランティアで日中友好のために役立てられれば、自分の生きがいになり、又お互いの喜びにもなるのではないかと考えました。

その内、思いがけない縁に恵まれ、中国のある学校からボランティアで日本語を教えるという依頼がありました。私は中国で日本語を教えるという気持ちがありましたので、二つ返事で承知しました。行った所は看護専門学校です。授業は五十音の繰り返し、簡単な会話や単語から教えました。授業が単調にならないよう、『日本の歌』さくら『幸せなら手をたたこう』『こんにちは赤ちゃん』等を何回も歌って教えました。この試みは大好評で、学生は喜んで、上手に歌えるようになりました。中国で自分が教えた日本の歌を、中国の学生が歌うのを聞くのも感慨無量です。この学校には付属幼稚園があり、園児にも日本語を

教えてほしいと要望されました。このような小さい子供達に、どのように日本語を教えたらよいか戸惑いました。結局、子供に教えるのではなく、一緒に遊びながら日本語に触れる機会を作ろうと決めました。この為に子供に興味のある物を数十枚も絵に描いて、日本名を教えたり、挨拶を教えたり、日本の歌と一緒に歌ったりしました。子供の日には、幼稚園の広場で色々な遊戯を大勢の家族の前で披露します。私が教えたクラスも『幸せなら手をたたこう』を歌い、多くの家族から大きな拍手を受け、大成功でした。又、私は毎朝公園に行き、太極拳を習っていました。太極拳の先生は日本語に興味があり、日本語を教えてほしいと言われ、先生と練習生に挨拶や簡単な言葉を教えめました。しだいに公園の一角は日本語コーナーになって、皆初めて口にする日本語に興味津津の様子でした。このように図らずも私流の日中友好の交流が徐々に実現できて、心から嬉しく思いました。

今、中国人の主婦や医師に日本語を教えています。彼らが日本の文化、習慣、考え方等を理解する一助になれば、実に意義深い事だと思えます。

その他、ボランティアで通訳をしています。中国物産展、博覧会で、又、病院で中国人家族と看護師の間にとって通訳をします。時には、中国人研修生とバーベキューをしたり、忘年会で騒いだり、春節には餃子を作ったり、楽しい一時もあります。私流の友好交流の輪が次々広がり、心から生きがいを感じています。これも中国語を曲がりなりにも習得したお蔭でもあると感じています。

今後の目標は、中国語能力を更に高め、ボランティアに徹し、

通訳をしたり、日本語を教えたり、相互理解の交流を一層促進したいと考えています。これこそが私の後半生の大きな生きがいであり、喜びでもあります。



子供の心にふるさとからの メッセージを贈ろう

御前崎市 曾根竹男

雲の間から金色に輝く朝の光が射しこんで来ます。朝早く、歩いて近くの体験農園に向かいます。子供達が家族と一緒に植えた野菜が今すぐと育てています。

今年で13年目を迎えたわんぱく農業体験園です。この農園で1年間さまざまな実習と交流と絆を育み、千人を超す子供達が巣立っていきます。

平成13年6月「汗を流し、協働して土と心耕そう」を合言葉に公民館の学習講座、親子農業体験がスタートいたしました。子供達が一年間の農業体験を通して、農業の大切さや苦勞を身をもって学んでいくことが必要と考えました。地元農家の人達や多くの仲間と交流しながら収穫の喜びや苦勞、ふるさとへの思いと感謝の心を育てています。

この事業を支えているのが御前崎わんぱく農業体験推進協議会です。曾根紀久雄会長をはじめ地元農家の人達や公民館等の協力をいただき年間13講座を開設、今年も70人の家族が参加しています。年間活動の概要は、春に夏野菜を植え、さつま芋植付け、

10月芋掘り、11月市産業まつりに参加し、芋切り干作り体験等を行います。その他、黒糖づくりや味噌づくりに挑戦しています。

又、施設見学や絵本の読み聞かせ、郷土の偉人、いもじいさんや切り干しじいさんのお話しもしています。

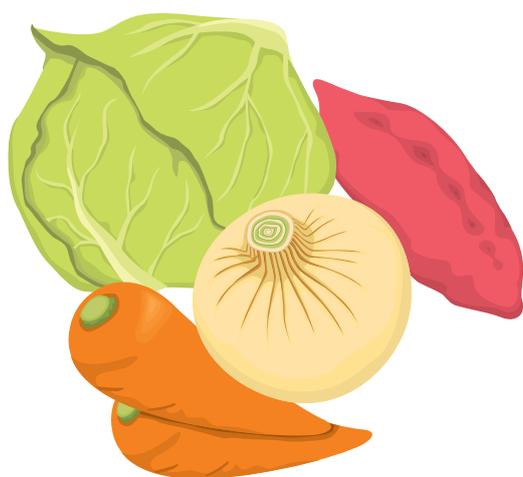
この他保育園、幼稚園、公民館の幼児学習グループや老人福祉施設のいも植え、収穫も行なってきました。

体験推進協議会のメンバーは74才を筆頭に全員が熟年でボランティア活動です。

活動を通しての感想は、何を聞いても、子供達が好き嫌いが無くなった、少なくともったこの言葉が一番うれしく思います。

キュウリ、トマト一つ作るのに鳥害や早魃、害虫の駆除と子供達が身をもって知ってこそ、食育があると考えます。

今、子供達に一番必要な事は理論や知識だけでなく、体験を通してふるさとを知り、ふるさとに感謝し、ふるさとを誇りとする心です。



御前崎は三方を海に囲まれ、静岡県最南端の岬です。強い季節風と荒海の遠州灘、岩礁も多く灯台沖では多くの船が座礁し難破して来ました。砂地地帯の農業は飛砂防止や早魃に大変苦労いたします。命懸けで新しい漁場開拓に取り組んだ漁師の人達と何糞精神、ここには何処にも負けない伝統と文化があります。厳しい自然環境の中で、力を合わせ、自然と闘い、限らない栄光と発展をもたらしてくれた先人、先輩の人達の意気込みと努力を私達熟年が伝えていくことが大切です。

私達わんぱく農業体験推進協議会のメンバーはこの他、昔遠州灘で行われた伝統和船を復元し、平成18年伝統和船保存会を結成、毎年夏休みを中心に子供達の櫓こぎ体験会を実施しています。

又ふるさと再発見とコミュニティ活動の一環として二年間に亘り、郷土の偉人、切り干しいも普及の先覚者、加藤円十翁、明治の開墾に尽くした村上政忠を地区センターで上演しました。

これもふるさとへの思いを一層深めていきたいと考えました。

子供の心にふるさとからのメッセージを贈り、心豊かで逞しい青少年の育成に努めていきたいと考えます。



若年寄夢路遙か

静岡市 多々良友彦

今年是我们设施的「静岡光の家」を創立して45周年になります。それは私が36歳の春、富士市のある高校生が視力減退で就職できなくなり、悲観して自殺されたということをラジオで聞き、大きなショックを受けたことから始まりました。私も17歳で全盲者となり、住み慣れた家の中ですら思うように歩けなくなり、随分悩み抜いてきたからです。盲学校で点字を学び、鍼灸マッサージ師の免許を取得し、何とか自立の道も開け、狭いながらも楽しい家庭を持てるようになっています。

前々から教会の仲間と福祉問題の研究会を行ってきた関係上、昭和42年6月24日、拙宅で第1回の理事会を開催、盲人福祉施設「静岡光の家」をスタートさせました。翌43年6月には第2種社会福祉施設設立を県から認められました。それ以来ソーシャルワーカーの友人たちと中途失明のリハビリ、生活訓練、社会参加の支援と懸命に務めました。スモンやベエーチエット病という難病団体の結成、みんなで住みよくする会（200人位の市民グループ）の運動で、静岡市に点字ブロックが敷設され、役所サービスも向上、さらには身体障害者手帳提示でバス料金軽減など全国に先駆けて

実現することができました。点字書の貸し出し、音訳書の作成等、成果を上げていきました。

けれども古い民家を手入れしての施設で、20年ほどすると安全性の問題からやむなく解体を迫られ、施設存続の危機を迎えました。悩みに悩んだ末、初老の身を顧みず、元利1億円の「借金コンクリート」3階を建設、静岡県の済生会から生活訓練ホームを認められ、新たなスタートを切ることとなりました。

一方、静岡、浜松の病院のリハビリ講師として出張する身となり、中途視覚障害者の盲学校進学のお手伝いを30数年に渡り務めさせてもらいました。一時は絶望を感じる方々が多いのですが、現に中途失明の私が、どうにか自立できていることにも励みを感じてくださり、70余名の方々が点字を学び、鍼灸師の資格を取るために盲学校に進学することができました。中には高校教諭だった方で盲学校教師になられた方もいます。いわば、教え子みたいな方々も親しい仲間となり、長年の友愛を私は感謝しています。先生といわれなくてもよい、私もソーシャルワーカーとしていつも勉強を続けなければなりません。

一方、視覚障害者の執行理事として、連合会やほかの施設の理事者としておとなしく過ごしてられない毎日です。施設を始めからこれまでに寝不足・過労のため16回も失神状態になりました。けれどもCT・MRI・古田検査でも異常はなかったようです。熟年になっても休んではいられなかったので、天の神様が急ブレーキをかけてくださったわけで、今もどうやら歩き続けていられるのだと思っています。けれど、熟年期も高くなり、スローライフを心がけねばと思っています。施設や団体のことから、年中無休

の「つくつく奉仕」、「とっちゃん坊やお手伝いさん」の胸看板を押し出して暮らすわけにはいかなないと自戒しています。

長い人生、時に思いがけない事柄が起こっても不思議はないわけ、この歳までに楽しい思い出、辛い出来事も数々ありました。熟年期に入っでの思い出の一つに長野オリンピックの聖火ランナーがあります。盲目の私を娘が伴走したいという希望が認められました。しかし、娘は第二子を受胎し、急遽娘婿が伴走者となりました。67歳の冬です。普段走ることのない私は、ペットボトルをトーチに見立てて掲げ、部屋の中でその場駆け足をしたり、時には娘婿と実際に走ったりしながら当日に備えました。

12年前の1月22日の朝、静岡市内の南幹線を第4ランナーとして走り出しました。ところがまもなく裏通りから火災発生。大火となり消防車が行き交う中を警察官の指示を受けながら次のランナーへとトーチを引き継ぎました。辛い死者、怪我人もなかったと聞いています。思いがけないハプニングに見舞われましたが、世界市民の一人として、オリンピックに参加できた思いで大変光栄でした。同じ火災がらみで、施設借金の抵当物件である私の所有する貸家が知的障害者の放火で焼けてしまい、こちらは大きな痛手となりました。しかし、どうにか借金返済のめどがついていることは幸いです。

平成24年10月13日、光の家45周年記念集会を施設利用者、職員、奉仕者グループの世話にもなりながら、楽しく、盛大に行うことができました。45年の歩みは決して楽ではありませんでしたが、視覚障害者に希望の灯火を与える一助にはなっただけのものと思っています。光の家の事業がさらに大きな木となり、実のなる

5年計画を期し、新たな活動を切り開いていけるかが現在の課題です。中途視覚障害者の偉人サンパウロの言葉「希望は失望に終わる事はない」を信じ、仲間たちと共に、希望と輝く夢路を歩き続けようと願っています。

付記

平成25年1月、長年私の目となり活動を支えてくれた愛妻容子が天に召されました。私にとっては新たな挑戦の始まりとなりました。このメッセージを感謝を込めて妻に贈りたいと思います。



「静岡光の家」の仲間とともに（タンデム自転車体験）



妻との最後の写真



長野五輪 聖火リレー

熟年パワーで全国へ

静岡市 前山博茂

私の故郷は空青し山青し海青しと謳われた紀伊半島の南端の街ですが、東京や大阪に出るにはたいへん難儀な場所、恥ずかしながら私は50歳まで新幹線に乗ったことがなく、当然ながら故郷に住み着いて一生を終えるつもりでした。

ところが50歳の時、勤めていた製紙工場が工場閉鎖することになり、従業員は退職するか、転勤するかの選択を迫られ、私は考え考えた末に転勤を選び、妻と共に静岡に赴任しました。伊豆半島を抱えた静岡県は故郷の気候風土とよく似て、暮らしやすい所で妻ともどもほっとしましたが、それまで三交替勤務だった私の仕事は事務部門に配属され、パソコンや電話でのやりとりとなりました。

32年間蓄積した洋紙製造技術は全く役に立たず、事務の仕事はわからないことばかりで、職場の人の助けを借りながら、また言葉のなまりにも冷や汗をかきましたが、そんな悩みは七間町で映画を観たり、県立美術館のロダン館の地獄の門の前に佇んで、明日への活力を頂き、隣接する図書館では真摯な態度で勉学に励む若者の姿に、私も負けられないと奮い立ちました。

静岡での生活にも慣れてきましたが、早いもので気がつけばも

う60歳。定年です。定年を迎えた転勤者のほとんどは故郷に帰っていき、私もそのつもりでしたが、しかし日本は有り難いことに長寿の国です。空青し山青し海青しの故郷に帰っても、長い人生の残りを何を生きがいにも送ればいいのかと案案し始めました。故郷でだらだらと日々を過ごすよりは、そつだ！。文化が発達し、伊豆や熱海という格好の小説の舞台がある静岡に居着いて、小説を書きたい。その思いが膨らみ膨らんで、半ば強引に妻を説得してこの地に留まりました。

60歳から小説を書くといふことは苦しいことばかりで、遥か遠い目標にも思いましたが、とにかく前に進もうとリュックを背負い、その中に原稿用紙、筆記用具それにおにぎり2個と少々のおかずを妻に詰めて貰い、図書館に通いました。

通い始めて3年間は小説ばかり読みました。県立図書館の凍と化した空気の中で、若者が明日におかたて勉学している姿を横目に見ながら小説を読めることは、青春が甦ったよつな心地よい時間で、この空気に触発された私は書きたくてうずうずしましたが、3年間は助走期間だと自分に言い聞かせ、小説を読み続けました。原稿用紙はまっ白なままでしたが、リュックの中に入れておくだけで意義があるように思え、やっと3年経ちました。

いよいよです。不安と恍惚の入り混じる中で、目標を『伊豆文学賞』一本に絞りました。小説を書くという原稿用紙の柀目をひとつひとつ埋めていく地べたを這うような行為は、想像以上に神経を消耗し、途中で何度も投げ出したくなり、また読み返すと何を書いているのかさっぱりわからず、一から書き直すこともありました。締切り一日前に、『第13回伊豆文学賞』に応募するこ

とが出来ました。

原稿用紙を郵送し終えると、ほおおお、と溜息をつき、快い解放感を得て久しぶりに、とりあえずビール、を堪能しました。結果がきました。ときどきしました。『残念ながら、あなたの作品は……』との結果でしたが、考えてみれば、この賞は随筆、紀行文含めて200編超が鎬を削る権威ある賞なのです。

私のような素人が入選できる訳がありませんが、小説を完成させ、投稿できたことの高揚感から次回も応募しよう決めて、今まで以上に図書館に通いました。

幸いにして第14回にも応募し、結果は最優秀賞を頂きました。うれしくて天にも昇る気持ちでしたが、表彰式当日、選者のひとりである嵐山光二郎先生がぼつりと言ったひと言が胸を突きました。

「伊豆文学賞受賞者は、その後全国に出ていないんだよね」と。私はその言葉にムラムラとききました。熟女にムラムラではありません。

ここで満足してはだめだ。全国がある。と先生に言われているような気がしました。出発が遅かったので、題材の引き出しはまだ残っています。全国を屈指そつと思いました。

学生時代のように指に鉛筆瘤をつくり、熟年パワーを楽しみ苦しみながら、先生のひと言に奮い立って、半年後には全国レベルの新人賞に応募しましたが、残念でした。一次も通過できませんでしたが、今後もしつこく挑戦したいと思っています。

私は静岡で生きがいを頂き、静岡に居着いてよかったです。妻も介護の仕事の合間をぬって絵手紙や体操教室に通い、はつらつと暮らしています。



他人の喜びは私のいきがい

島田市 宮地文子

ペン書道との出会い

私は高校3年の時、島田市で開催された「ペン書道講座」に参加しました。流れるような美しい文字に憧れて参加したのですが、講師の素晴らしい文字にすっかり惚れ込み、即講師の先生が所属する協会に入会し、毎日寝るのも惜しんで書きまくりました。

そして結婚した時、止めようとしたのですが、主人の「折角ここまでやって来たのだから続けるよ、俺もやるから教えてくれよ」の一言で共働きをしながら2人で続け、短い期間で師範免許をいただきました。

その後、子供が生まれ、子育て、共働きと大変でしたが、お互いを競争相手にして続けることが出来ました。そして「ペン書道」に続いて、「書道」にも挑戦することになりました。小さな子供をおんぶしながら、軽の車で2人で横浜の先生の所まで教えていただきに行ったり、東京の本部へも何回も出かけました。そして、こちらも2人揃って師範免許をいただきました。

書道教室の開始

子供が幼稚園になった時、同級生の親から「書道を習わせたいが近くに塾が無いし、あなた書道を教えてよ。」と言われました。

私はお断りしましたが、実家の父に話すと、父は「お前も皆さんに助けられて今日まで来たんだ、他人はその人が出来ない事は頼んでこないよ、他人の為になることは気持ちよく受けなさい。自分の勉強にもなるから」と、教えてくれたのです。それで、素直に納得し、書道を教える事にしました。

友達の子供達7人に教え始めたのですが噂が広がり生徒は日に日に膨れ上がり、あっという間に100人を超えてしまいました。最初は無料で教えたのですが、本部から「月謝を買ってしっかり教えなさい。教える方も教えられる方も無料だと身が入らないから駄目だよ」と注意されました。

主人はその頃大きな会社勤務で、毎日朝早く夜は遅く、生まれた2人目の子供に顔を覚えて貰えない状態でした。一方、私は、子育てをしながらの共働き生活で、書道教室と父の介護と大変でしたが、若さと周りの人たちの愛と協力により助けられました。

禅画の道への転機

主人が42歳の時、突然会社を辞めて書道を本職にしたいと言い出しました。今まで私一人で手掛けてきた書道教室を主人とはいえ、任せるのはとても寂しい思いでしたが、妻の私が先に立っていたのでは、と私は助手に徹することになりました。

そして自分の道へと「禅画」を習い始めたのです。勿論、書道

教室も手伝いながら禅画を描き続けました。禅画協会の会長にも可愛がっていただき、最高の肩書も戴きました。

ボランティアへの発展

あれから40年、主人は書道に専念し、私は禅画で人の心を慰めようと、色々な方面に禅画を使ってボランティアで頑張ってきました。健康の事、心の事、その他色々勉強させていただき、禅画も師範になった主人と共に人助けをしてきました。

一人暮らしや病気で落ちこんでいる方に元気になる一言、「一寸先は光だ明日が楽しみだね」とか「明日良いことがあると思っでござらん、今日が幸せになるよ」また、「あなたは大切な人だから何時も笑顔でいてほしい」とか、「いいことが山ほど来る」「凶太く行こう、負けたら駄目だよ」、「すぐそばにあなたを守るやさしい手」、「あなたの笑顔は他人も自分も助けるよ」、と言った励ましの言葉を入れた禅画絵手紙を毎月送り続けて来ました。

その他に送ったものとしては、老人施設等へ禅画掛け軸を。サイパン、広島、地元戦没者の会へは5メートルの布地に描いた安らぎ大達磨を。近隣市町の一人暮らし老人には色紙、数百枚を。阪神大震災へは2人展の売上げ、40数万円を。昨年、今年と東北大震災被災地へ禅画色紙、栞、団扇、絵馬、カレンダー、半紙に描いた起き上がり小法師等数千枚を。

このように、とてもここには書ききれない数の物を送り続けてきました。勿論、周りの皆さんに助けられ、喜びのパワーをいただき、私自身も楽しみながら。

喜びの笑顔と声

地元小学校の「和文化の体験」と言う勉強会には、10数年に亘り2人で達磨の指導に行っておりませんが、書道教室の子供達にも慕われ、悩みの相談に乗ったりしています。また、毎月禅画葉書を送っている人達には「私がとても辛い時、必ずあなたの葉書が届くのよ、おかげで元気が出たわ、有難う」、「あなたからの葉書、額に入れて飾ってあるの、あなたの葉書が150枚を越したわ」と私の方が励まされております。

自分の為に始めたペン書道から多くの人々の心を救うことのできる書道と禅画、健康の勉強にもつながり、皆さんの笑顔に助けられ今後も続ける力を戴いております。多くの方々の愛と協力に助けられ、小さな力ですが、一隅を照らしてゆきたい。

私の夢は自分が息を引き取るその時まで周りの皆さんに笑顔と喜びを与えられる人でありたい。若かった私に父が教えてくれた「他人は出来ない事は頼んでこない、他人のお役にたつ事は気持ちよく受けなさい」、「の言葉を守って、何時も笑顔で「ハイ喜んで」と。



1本のギターから

静岡市 森 美佐枝

「森さん、あのね」ギターの音色が響く中から、突然かわいい声が飛ぶ。ここは私の仕事場。そこにギターの音色と楽しげな子供たちの声が響きわたる。今日は、東京で活躍中の全盲のギタリスト服部こうじ君のギターセラピーの日だ。参加者は、「発達障害」の中学生3人。

まずは、これまでの経緯を話すしよう。

東北の私の友人たちが、東日本大震災で被災した。翌日に、彼らと携帯電話が繋がり、支援が始まる。それをみていた近所の春ちゃんも、「私たちも何かをしたいと」、友だちと協力し、使わなくなつたランドセルや文房具、絵本などを集めてくれた。春ちゃんは、「特殊クラス」の中学1年生だった。

それが縁で、時々、学校帰りに私の職場(家)に顔を出すようになる。

「震災支援の「コンサートを開きたい」との私の一言で多くの人達が協力してくれたが、もう一人の主演、服部こうじ君とは、それが縁で交流が始まった。

春ちゃんとこうじ君がここで交わり、こうじ君による春ちゃんのギター教室が始まる。

これを面白がった大人たちがサポート。

この活動を見た障害を持った中学生2人が参加、「春ちゃんバンド」の結成である。

自己主張の強い彼らは、人の話は聞かない、訳もなく歩き回り、寝転ぶ、思った通りにいかないと凹むは、パニックになるは。

なんでこんなことに拘わってしまったのかと、後悔の毎日の私。

だが、日に日に子供達の表情、態度が大きく変化していった。それまで、自分勝手に演奏していたのが、皆と合せる技術を身に付け始めたのである。他の仲間の演奏を聴くことができるようになった。リズムが合ってきた。

この子供たちをみていて、私にできることは、これから社会に出て、一人の人間として守らなくてはならないルールや気遣いを、しっかりと身に付けさせることだと気付いた。

そのため、がんがんに叱るが、不思議にも、お節介な小うるさい、おばさんの言う事はきつちりと聞き、めげずに毎週やってくる。それも楽しそうに。全然こたえた様子は見られない。こちらが逆に不安になる。

「最近、森さんみたいなおばさん、いなくなつたよね」と、お母さん方に言われた。

学校の担任の先生が、「春ちゃん、急に変わったけど、何かあったのかな?」

ギタリスト服部こうじ君も変った。

東京での一人暮らしのため、最初は、大家族状態に戸惑いをみせていたが、楽しそうに静岡にやってくるようになった。それまで日帰りしていたのが、最近は2日も、3日も泊まってみんなと交流を

うさぎ。

このような活動を通じて、ギター教室は、障害を持った子供や、「訳あり」の病んでいる人達の心を癒す場所となるように、夢を込め、ギターセラピーと呼ぶこととなった。

少し自信が付くと調子に乗るのが春ちゃんバンド。

「CDを出せ！」

「突然何を言い出すのだ。素人集団が何を考えているのだ。満足に演奏もできないのに。誰か止めに入るのが普通だろう」ところが、これがこのメンバーの凄いところ。

「やるっ、やるっ」でCDを作りました。タイトルは「自転車に乗るのな」。

みんなでお金を出し合い、声をかけ合い、総勢30人で収録。

ジャケットの絵は、知り合いの銀行員さんが書いてくれた。曲は、総て自分たちで作詞・作曲したオリジナル。

最近、自転車の事故が多いと聞く。自転車の危険運転は命にかかわる。でも、自転車のルールやマナーってよく分らない。そうだとこれを歌にしよう。

「携帯電話は自転車停めてから」

「左側通行、車道を走るのが原則」

このような内容で、3人の中学生をモデルに、アニメソング風にまとめたのが「自転車戦隊★GO」

この活動が新聞で紹介され、岡部に住む72歳のおばあちゃんからの突然の電話。

「新聞に掲載された写真がとても楽しそうで、CDを聴いて歌の練習をしたい。おばあちゃんだけど、いつかは皆さんの仲間に入れて

もらえたら嬉しい。CDを送って欲しい。」

「うさぎや、録音に参加したおばあちゃんは85歳だよ。きっと、いつか岡部でコンサートやるから、しっかり練習してね。」

一本のギターを通して、春ちゃん、服部こうじ君、お節介な人達の輪が、どんどん太く広がっていく。最近は全盲のフルート奏者網川泰典さんも加わり、音楽も活動の幅もぐっと広がった。考えているより、まずはやってみるのだ。

お節介なおばさんは、発達障害の中学生、視覚障害のギタリスト達から多くの感動と沢山の大切なことを学びました。かわいいおばあちゃんになりたいと言う人が多い中、私は、叱るべき時は愛情をこめて厳しく叱り、自分で正しい判断ができる様にきっちり説明をし、楽しい時は率先して雰囲気づくりをしていく、そんな行動力のある、豪快なおばあちゃんになれたらいいなと思っています。

これからも、わくわく気分挑戦し続けていきたい。





大会会長	佐古 伊康	しずおか健康長寿財団理事長
実行委員長	西谷 祐一	駿州夢づくり交流会
実行委員	日詰 一幸	静岡大学人文学部教授
実行委員	砂田 学	駿州夢づくり交流会
実行委員	平田 五子	静岡県老人クラブ連合会副会長
実行委員	松浦 孝治	静岡県文化財団専務理事
実行委員	森田 みか	(有)創造工房専務取締役